

魯迅の中医中薬に対する見方

丸尾 勝

一 はじめに

周樹人、後の魯迅の父周伯宜は三人の中医に受診したが、効果がなく死亡した。苦勞しながら見守ってきた父の死の衝撃は魯迅にとって大きく、『《呐喊》自序』で中医のことを「意識的無意識的詐欺」⁽¹⁾と不信の念を示しきびしい非難を浴びせた。魯迅のこのような中医中薬の見方については従来議論があり、中医側や中医支持者から不満が起こり、許広平や周海嬰に見解を求める人もいた。

中医中薬については有効かどうかに重きを置く見方が多い。これは医学は結果が求められる実学である以上当然である。魯迅も同様であり、有効性や合理性があるかどうかという見方をする。が、それだけではなく、魯迅は人の姿勢を見る。医療に携わる人がどのような姿勢であるかを見る。ここでは、この二つの観点から魯迅の中医中薬に対する見方を調べていく。なお中医中薬への見方は多くは西洋医学への見方と一對のものになる。

中医の中に中薬は含まれ、中医と中薬は一体のものであるが、中医と中薬を分別した方が混乱を避けられ、また、中薬が注目される時期があるので、場合に依じて中医と中薬とを分ける。そして、著作の資料を内容別にまた時期別に分けて調べる。それから、魯迅は旧制度、旧道徳や旧文化との闘いに忙しく、直接中西医論争に加わったことはないが、関わりがある箇所では、中西医学対立の状況の中で見ていく。対立史には主としてラルフ・C・クロイツァー著の『近代中国の伝統医学』⁽²⁾を参考にする。

また、中医中薬は伝統の文化であるが、京劇、版画や絵画などの他の伝統文化に対する魯迅の見方も調べて、魯迅の伝統文化に対する見方をも合わせ考えていく。

なお、この論文は魯迅が中医中薬に対してどのような見方をしたかを追求するものであって、その見方が妥当かどうかを論ずるものではなく、また、伝統的な中医中薬が正当で有効な医術医薬であるかどうかを論ずるものでもない。それから、1918年に『狂人日記』を発表した際初めて魯迅という筆名が使われたので、1918年以前は魯迅ではないが、統一して魯迅を用いた。

二 作品中の中医中薬についての描き方

(1) 父の死

父周伯宜の死について、1922年執筆の『《呐喊》自序』や1926年執筆の『父の病気』などで言及している。魯迅の父は1894年頃突如大量の血を吐き、一時小康状態を保つが、水腫でむくみが足から腹や胸にまでおよび、1896年に死亡した。

この二つの作品には事実と異なる点があるという指摘がある。『《呐喊》自序』で魯迅は4年余り質屋と薬屋に通ったと述べるが、であれば父の発病は1892年になる。周作人は1892年では、事故死した周康に父親が経帷子の着せ替えをし、施餓鬼を催す時期と合わず、父親が日清戦争の話をしていた時期とも合わないという指摘し、父の発病は1895年の春か1894年の冬ではないかと推測する⁽³⁾。周建人は、父親の吐血は、祖父の1893年の贈賄事件の翌年の新年の祝いの後であり、その後小康状態になった父が一族と墓参をした清明節の前であって、また、自分の母親が母親の実母に夫が早春に吐血したと語っていたので、父の発病は1894年の春とする⁽⁴⁾。また、周作人は靈丹を売ろうとしたのは陳蓮河（何廉臣）ではなく、馮という医者であると誤りを指摘する⁽⁵⁾。また、周作人は、薬引の平地木は先祖の墓地より邸

内に移植され「老弗大」と呼ばれ、これは魯迅が愛読した『花鏡』にも書かれていて、魯迅が知らないはずはないと指摘し⁽⁶⁾、周建人も魯迅と一緒に「老勿大」の平地木を引き抜いたことがあると述べている⁽⁷⁾。また、魯迅は薬引として古米を挙げないが、この古米は三味書屋の寿鑑吾先生がわざわざ持ってきてくれたもので、魯迅にも印象深いはずであると周作人は指摘する⁽⁸⁾。それから、『父の病気』では死にいく父親を魯迅に呼び戻させる衍太太が、魯迅が『国民公報』で発表した『私の父』では乳母となっていて⁽⁹⁾、周作人は家族ではない衍太太が臨終の席にいるはずはなく、これは阿長であり⁽¹⁰⁾、周建人も長媽媽とする⁽¹¹⁾。魯迅は父親を呼び戻すことができず父親は死んでしまったことを母親に泣きながら話をしていたと周作人は述べているが、この事件は少年の魯迅には相当心が傷むことであり、また、死にいくものの安らぎを掻き乱した悔いになり、これらの張本人のことを忘れるはずはないだろう。この二つの作品にはこのように事実と違う箇所が何箇所もあり、記憶間違いがあったとしても、これだけあれば虚構性がある作品とは言える。

また、『父の病気』は虚構であるという指摘がある。藤井省三氏は『父の病気』について、「『S市』の中医たちが伝統医学の枠組みの内では誠実な名医であったことは十分承知しながらも、魯迅は彼らを『ペテン』で父を死に至らしめたという虚構を組み立てたのであろう。『父の病気』の語り手である『私』は、秘かに父の安楽な死を願いながら臨終の際に『父上！』と叫んだことを自らの罪と自覚している。父を死に至らしめたのが中医であるとすれば、『私』の贖罪とはこの伝統医学を完膚なきまでに否定することによって可能となるであろう。」⁽¹²⁾と述べ、贖罪のために故意に中医を強く批判する虚構を組み立てたとする。

周作人、周建人や藤井氏の指摘のように、確かに虚構性のあ

る作品ではある。が、すべてが虚構ではないだろう。『朝花夕拾』の『小引』で、実際の内容とは少し違う所があるかもしれないが、執筆当時の記憶の中より抜き出したものであると述べている。また、『私はどのようにして小説を書くようになったか』で、「書くことの事柄は大抵ちょっと見たり聞いたりしたことがあることを基にしており、決して事実を全部用いているのではなく、一端だけを採用し、改造し、あるいは発展させていき、自分の考えがほとんど完全に発表できるまで続ける。」⁽¹³⁾と小説の作り方を述べていて、小説の創作の場合でも事実を基にしているからには、回想風自伝の場合にはなおさらであろう。そして、この作品の筆者の発表したい「考え」は藤井氏によれば贖罪であるが、それだけではなく、中医中薬批判でもある。たとえ中医による父の死という虚構が組み立てられたとしても、たとえ枝葉末節が事実と相違したとしても、中医中薬批判という基調は疑いのないことではないか。『《呐喊》自序』（1922年）に書かれているように、この父の病気の体験から得た将来への考え、即ち「私の父のように誤りで苦しんでいる病人を救ってやる」という考え⁽¹⁴⁾が実際に仙台医学専門学校への入学に繋がっている。ということは、入学を実現させるほどに中医中薬への強い批判があったことになる。また、「『ひげ』から話は『歯』まで」（1925年）で「漢方医がどんなに信用できると言われても、民間療法がどんなに効果があると言われても、どれも信用しない。理由の大半は私の父の病気が手遅れになったこともあるが、恐らく身にしみる苦痛を味わった自分の恨みもあるだろう。」⁽¹⁵⁾と書かれている。父の病気が手遅れになった理由で漢方医や民間療法を信用しなくなったとここにはっきりと書かれている。

魯迅は中医の治療に対する見方として有効性や合理性があるかどうかの見方をする。魯迅の描いた紹興の中医たちは合理性

を欠き、ことばや觀念に固執している。『父の病氣』には本来書かれるべき水腫以外の症状や主薬などは書かれていない。書かれているのは、名医と言われる中医のいい加減な診断と診断費用の高い噂に始まり、手に入れるのがむずかしい薬引でも金さえ出せばすぐに手に入れることができること、葉天士先生の梧桐の葉の玄妙さ、陳蓮河先生を紹介して自分は身を引いたこと、陳蓮河先生の調達しにくい特殊な丸薬、散薬、丹薬と珍しい薬引の処方などのことや、「医は意なり」、「舌は心の靈苗なり」、「医はよく病いを医すも、命を医す能わず」などの名言である。たとえ虚構があつたとしても、いずれも合理性を欠く奇妙なことばかりで、合理性のなさを痛烈に批判している。批判は、『《呐喊》自序』の中の「意識的無意識的詐欺」ということばに凝縮される。

それから、魯迅の中医へのもう一つの見方として医療に携わる人の姿勢がある。往診代を吹っかけ、入手しにくい金さえ出せば入手できる薬引を処方し、身代わりを推薦し自分は身を引いて責任逃れをし、占いを勧め、丹薬を売ろうとすることなど、自己保身しながら儲ける医業をしていると見て、魯迅は強く反感を覚える。また、「医は意なり」の梧桐や敗鼓皮丸、

「舌は心の靈苗なり」の丹薬、鬼を信ずるところに魯迅は中医の虚偽を感じている。須藤五百三医師の『医学者から見た魯迅先生』で、「彼はいつも『最も嫌いなのはうそをつく人と煤煙で、最もうれしいのは正直な人と月夜である。』と言っている。」⁽¹⁶⁾と書かれているとおり、虚偽を最も嫌う。嫌悪感だけでなく、描き方には、父親を死に至らしめ、身代を傾かせた要因となった恨みや、質屋と薬屋を往復し必死に薬引を求めた少年の純真な心情をもてあそび、そして裏切られたことに対する怒りが込められていて、嫌悪感、恨みや怒りを引き起こす中医の姿勢に対する批判が現れている。

魯迅は、周一族の一人として新台門に住み、様々な事件に出会い、様々な人物を早くから見てきた。また、少年時代に祖父の入獄、父の病気、田舎への避難、父の死、家長の負担、家計の困窮などの苦労を経験し、多くの憂き目に遭い、人の表裏を見てきた。「まあまあの暮らし向きから、急にどん底生活に陥った人があるとすれば、その人はきっとその過程で世間の人々のいつわらぬ姿を見るだろうと私は思う。」⁽¹⁷⁾（『《呐喊》自序』）や、「だが、どこへ行くか。Sの町の人の顔はとっくに見飽きるほど見てしまった。腹の底までだいたいわかるような気がする。」⁽¹⁸⁾（『瑣事』）のことは、様々な人物の内面を見る目が磨かれてきたことを示している。そして、国民性の改造、『文化偏至論』、『摩羅詩力説』や『破惡声論』における物質より精神の尊重や「精神界の戦士」による民衆の覚醒、個人の自立を求める立人思想と人の内面の姿勢の重要性を説いた。さらに、『狂人日記』や『阿Q正伝』のような作品を創出し、内面の覚醒を促した。このように魯迅は人の内面の姿勢に注視し、個人として自立した姿勢を求め、それとともに、人の内面を見る眼も研ぎ澄まされ寸鉄人を刺すほどになっていった。

たとえば、魯迅は迷信と科学について『随感録三十三』（1918年）で、保守勢力は「諸惡の根源はことごとく科学にあり、迷信はすべての道德の基礎である。」⁽¹⁹⁾として迷信を擁護し科学を攻撃するのに対し、「中国を救治するには～薬はただ一つ、こういう迷信の敵である科学——上っ面だけのものではない真の科学しかない。」⁽²⁰⁾と迷信打破、科学尊重で反撃している。ところが、『破惡声論』（1908年）では、「偽士は去るべし。迷信は存すべし。これこそ今日の急務である。もしここで、自らの説くところこそ、もっとも輝かしいものであると称している者はといえ、科学を奉じて唯一の標準としている輩である。」⁽²¹⁾と科学を尊重する偽士を批判し、また、天地万物

の不可思議に心引かれて信仰を抱く民衆の迷信を擁護している。科学と迷信について見方が違うのは、何と対置しているか、魯迅の基準に合うかどうかにもよるが、その事柄を扱う人の姿勢を見ているからである。その人がその事を純粹に思い真に理解し、邪心・虚偽・欺瞞がなく、民衆の向上や安寧を願ってまともに対応しているかどうかである。それによって、科学は擁護されるべきものにもなり、また、批判されるべきものにもなる。迷信は打破されるべきものにもなり、また、擁護されるべきものにもなる。父の病気の治療に当たった中医はその姿勢の点でも不合格と見る。

中医は旧文化の一つとして民国初めの頃文化闘争でも批判されている。『新青年』の第1巻第1号の冒頭の『敬んで青年に告げる』で陳独秀は、「医者は科学を知らないがゆえに、人体の構造を理解しないばかりか薬性の分析もせず、病菌の伝染など聞いたことがない。ただ五行の相生・相克説、寒熱説、陰陽説に付会し、古来の処方のままに薬を与えるのみであり、その術には矢作職人とほとんど同じ罪がある。」⁽²²⁾と述べ、迷信を打破し科学を尊重する傾向の中で伝統医学は批判され、魯迅も同様であり、魯迅だけが個人的事情から中医批判しているのではない。たとえば巴金の『家』では、病気になった高旦那は有名な医者の診察を受け奇妙な薬と薬引を飲んでも治らないので、道士や巫女を呼ぶ事態になり死ぬことが描かれ⁽²³⁾、中医中薬を批判している。

ただし、作品を通して魯迅は中医を批判しているが、その該当の症例が少ないという批判がある。患者とその症例は限定され、診察した中医は紹興という地方の三人であって、この事例から中医全体に言及するのは妥当ではなく、一面的であるという批判が起こる。

(2) 留学時代とその後——医学の学習

父の死亡の後、魯迅は1898年南京の学校に赴き、1902年日本へ留学した。東京弘文学院の学友の厲綏之は魯迅と同じく医学志望であり、回想記で次のように述べている。魯迅は厲綏之に、自分が医者になるのは金儲けのためではなく、苦勞をしている同胞の病気を治すためであり、同胞の苦勞のおかげで留学できるのであるから同胞に恩返しをしなければならないと述べた。そして、張之洞は『勸学篇』で「中学為体、西学為用」と言ったが、魯迅はこの八文字を使うのであれば「中薬為体、西薬為用」と言い換えるべきであると述べた。さらに、魯迅は厲綏之に、「日本人は中医を漢方医と呼ぶが、實際上わが国の西医二字を習慣によって洋医と呼び改めるのが適切である。漢洋医を一体に融合すべきである。君が将来帰国したら自分を東医と言い、名実備え、人に頼らず、強く西医界に押しかけていくべきである。」⁽²⁴⁾と述べていた。この厲綏之の回想記は魯迅と知りあった1903年頃のことを『五十年前の学友』と題をつけ1961年に書いたもので、回想内容の信頼性が問われるであろうが、興味あることが述べられている。魯迅が同胞の病気を治すために医学を目指したことは、『《呐喊》自序』の医学志望動機と一致している。また、中国人が日清戦争で負けて蔑視される中、危機にある中国を本位にして考えていたようである。魯迅は「漢洋医一体」即ち「中西医の融合・一体」を強く主張したという。このことから「中薬為体、西薬為用」は「中医為体、西医為用」の間違いであることも考えられ、この場合、中国のものを本位とした、その時だけの意見に過ぎないかもしれない。が、父親の死亡以降中医を嫌っていたこと、「中医為体」であれば今後西洋医学だけでなく伝統医学も学習しなければならないことを合わせ考えると、「中薬為体、西薬為用」は記憶違いや誤記ではないと思われる。この場合、既に中薬の意義を認めそれを本位としたか、あるいはともかく中国のものを本位にす

るためには中医は効果に疑いがあるので残る中薬を本位とするしかないかである。前者の場合は、後に中薬を認めるようになるが、当時としては父親の場合の中医中薬に対する批判があり考えにくいので、後者ではないだろうか。また、学友に実力を備え、人に頼らず、自立する人の姿勢を求めたが、これこそが医師だけではなく、魯迅が中国人に求めていた姿勢である。

そして、魯迅は1904年9月より1906年3月頃まで仙台医学専門学校で医学等を学ぶ。魯迅がこの学校で学んだ内容は『魯迅医学ノート六冊』でわかる。『第一冊解剖学ノート』で解剖学総論・骨格学・靱帯学・筋肉学、『第二冊脈管学ノート』で脈管学・神経学・局部解剖学、『第三冊組織学ノート』で組織学・生理学、『第四冊五官学ノート』で五官学・内臓学、『第五冊病変論ノート』で病理学、『第六冊有機化学ノート』で有機化学であった⁽²⁵⁾。当時の日本の医学はドイツなどから導入したものが多かったので、魯迅は西洋医学を学んだことになる。また、魯迅はここで死体解剖を体験している⁽²⁶⁾。

魯迅は1906年3月頃仙台医学専門学校を退学し、医学をやめて文学に志し、文学によって国民の精神を改造しようと決心し、語学の学習、著作活動、翻訳活動、読書活動などに専念する。なお、魯迅が医学を止め文学に志したことを所謂「棄医従文」と言うが、文学志向のために医学を止めたのであって、医学に対する思いは残り続けることになる。このことは、詳しくは後で述べるが、以降魯迅が医療、医者、医薬品等にこだわり、『即時日記』（1926年）では「新しい医学」の普及を目指すと述べ、実際に自分で自分と息子を治療していることなどからもわかることである。

魯迅は1908年『河南』に投稿した『科学史教篇』で、中国の国粹を守る人たちが今日の学術・文学・芸術は中国に数千年前にあると主張し、外来文化に対抗しようとしていることを批判

している⁽²⁷⁾。直接医学に言及しているのではないが、中医などの伝統文化支持者も国粹主義者と同様に外来文化は中国に既にあったものだとし、西医などの外来文化を排外的に批判している。よって、この国粹文化を批判することは、中医批判につながる。また、魯迅は1919年に『新青年』に投稿した『なんということだ』で欧人は国粹画の画法に通じないという自慢を批判し⁽²⁸⁾、1933年に『申報自由談』に投稿した『中独国粹保存優劣論』で国粹を批判した⁽²⁹⁾が、この国粹の批判も中医を国粹とする説への批判になり、中医批判になる。

(3) 帰国後の杭州・紹興時代

魯迅は1909年帰国し、杭州の浙江両級師範学堂で生理学と化学を担当し、『人生象數』という講義用テキストを編著し、翌年紹興府中学堂に移り、教務主任を勤めながら生物学と生理衛生学の授業を担当する。1911年辞職し、辛亥革命が起こり、紹興光復後に浙江山会初級師範学堂の校長となる。このようにして魯迅は西洋医学に通じることになる。『人生象數』という講義用テキストについては、拙論『人生象數について』⁽³⁰⁾がある。

「人生象數」は生理学を指し、運動系・皮膚系・消化系・循環系及リンパ管系・呼吸系・泌尿系・五官系・神経系・生殖系に分かれている。このテキストのほとんどの文章と挿絵は、『解剖生理及衛生』（宮島満治著）、上記の『魯迅医学ノート』、『中学生理衛生教科書』（呉秀三著、申祺・文祺訳）、『生理学講本』（Steiner, J. 著、馬島永徳訳）、『通俗動物新論』（箕作佳吉著）などを参考にしている。

1912年校長を辞職し、南京に赴き、中華民国臨時政府教育部員となり、その後北京に赴く。

(4) 北京時代——『呐喊』などの作品

西洋医学は十九世紀に医療伝道士によって中国に伝播された。中国人の西医の集団は1915年中華医学会を発足させた。中華民

国政府も西洋医学を受け入れ、西医と中医との確執が始まり、新旧の対立は政治面や文化面だけでなく医学の面でも激しくなり、伝統医学に対して科学尊重の下に批判が強まった。

魯迅もまた科学尊重の下迷信打破を唱えていた。『狂人日記』（1918年）では、「何先生」という医者は実は首切り人で食人の一人で、「『本草なんとか』という本には、人肉は煮て食えるとはっきり書いてあるじゃないか。」⁽³¹⁾と、中医中薬が人を食う悪連鎖の基として扱っている。『薬』（1919年）では革命家秋瑾の人血の饅頭で病を治そうとする描写や、『明日』（1919年）では医者「何小仙」の、「中焦が塞がっている」や「火（肝）が金（肺）を剋する」といったことばに、伝統的な医術の非合理性が表れている。

『随感録三十三』（1918年）では、迷信と科学を対比させ、「科学は道理を明確にし、人にもものを考える筋道をはっきりさせ、いい加減なごまかしを許さない。」⁽³²⁾と述べ、陳正敏の『遯斎閑覧』の話を『本草綱目』の引用にもとづいて紹介する。楊勛は語を発するたびごとに腹中より声が応じる奇病にかかる。道士は『本草』を読んでいって声が応じなくなった所の薬を服用するとよいと言う。そこで、その薬の雷丸を服用すると病は治った⁽³³⁾。魯迅はこのような応声虫の話が跋扈するのを防ぐには科学しかないと述べる。

（5）北京時代——『《呐喊》自序』より『父の病氣』執筆まで

1922年作の『《呐喊》自序』と1926年作の『父の病氣』における、魯迅の中医中薬に対する見方についてはこの章の（1）で既に述べた。この両作品の執筆の間においても、下記のように見方は変わらなかった。ただ『父の病氣』の最後の箇所、陳蓮河（何廉臣）について、忙しく行動し、『紹興何とか学報』を発行し、西洋医学と奮闘中であると加筆し、その後の何

廉臣が努力している姿を正確に伝えようとしている。なお、何廉臣は字で、その後西洋医学を取り入れ、中西折衷の医術を施し、紹興医学会会長となり、『紹興医薬学報』を編集発行し、多くの本を著した⁽³⁴⁾。

魯迅は、『ふと思いつく』（1925年）で、天下の奇事の第一として医家の宝典である『黄帝内経』は筋肉はすべて手指と足指から発生したものであるとか何もかもでたらめで、検死の指南書の『洗冤録』は男女の骨の数は同じではないなど出まかせが少なくないと述べる。天下の奇事の第二として、自分の歯痛には様々な処方を試みたがうまくいかず、結局西洋医学の歯科医が根本的に解決してくれたが、中国人医師はこの二千年良い方法を考えようとせず、他の国のよい方法があればただまねるだけでしっかり学ぼうとしないと述べる⁽³⁵⁾。中国人の医師がよい方法を考え出さずとくどく述べ、しっかり学ぼうとしないところだわるのは、裏を返せば、中国人の医師によい方法を見つけ、しっかり学んでほしいということになり、信頼できる中国人の医師に治療をしてほしいという願いがあることになる。

次もまた歯痛のことについてである。既出であるが、より長く引用する。『《ひげ》から話は《歯》まで』（1925年）で、「盤古が天地を開いた昔から、中国はまだ歯痛を止めるよい方法を一つも発明したことがない。～『驗方新編』だけが唯一の救いの神だった。ところがその『驗方』をいくら試してみてもききめがなかった。」、「私ははじめて漢方医を正式に認め、薬を飲んだが、残念なことに漢方医も匙を投げたらしく、～日本の長崎に寄港した時、もう一度歯医者を訪れた。医者は歯の裏側のいわゆる『歯石』を削り取ってくれた。それでぴたりと出血はとまった。」、「後で中国の医学書を読み、ふとどきりとする学説を見つけた。そこには歯は腎に属し、『歯損』の原因は『腎虚』にあると書いてあった。～今となっては漢方医が

どんなに信用でき、処方がどんなに効くという人があっても、私は絶対に信用しない。」⁽³⁶⁾と述べている。中国人の漢方医の歯科医の診察を受けたということは、やはり、前段でも記したように、中国人の医師のまともな治療を本当は受けたいという願いがあったのである。魯迅は中国や中国人のことを悪く言うが、それは中国や中国人のことを熱く思うからであり、中医中薬についても同じではないか。それから、魯迅の中医中薬批判は一辺倒ではなく、あれこれと考えてみての結果であることが伺える。なおこの段と前段の作品は1925年に書かれていて、

『魯迅日記』に拠れば1913年より1916年まで徐景文、1917年・1919年・1923年と陳順龍に歯の治療を依頼しているので、この段と前段の中国人歯科医は徐景文と陳順龍、あるいは両方とも陳順龍ではないかと思う。

『弟兄』（1925年）では、誤診をする漢方医「白問山」と、高くない費用で誤診がなく、唯一信頼できる薬屋を紹介するドイツ人医師「プティス先生」とが対比的に描かれ、中医の診断がいい加減で、害悪の元になり、金儲けの手段になっていることが描かれ⁽³⁷⁾、中医を批判している。

孫中山の病状について1925年2・3月当時『大公報』、『民国日報』や『申報』などで毎日のように報道されていた。『孫中山年譜』によれば、1925年1月1日に西医の診察を受ける。1月26日病状が悪く、協和医院（アメリカ系医院）に入院し手術を受け肝臓癌とわかる。2月18日協和医院でラジウム治療するも効果なく、鉄獅子胡同の役所に搬送され、中医の治療を要請する。3月12日病死する⁽³⁸⁾。西洋医学を学び、医師の資格を取得し、開業も経験している孫文は、中医ではなく西医に頼ったが、ラジウム照射が効果ないこともあり、左右からしきりに薦められた中医の診察を遂に受け、中薬を飲む。この時診察した中医は、中医に反対であった胡適の糖尿病を治した陸仲安で

あった。拒否していた中医の診察を孫文が受け入れ中薬を飲んだことで、西医と対立していた中医たちが喜んだのは言うまでもない。このことについて魯迅は『中山先生逝去后一周年』（1926年）で、「新聞記事によると、西医が既になすすべがない時に中薬を勧める人がいたが、中山先生は飲むことに同意せず、中薬の効果はもとよりあるが、診断の知識に欠け、診断ができないのにどうして服薬が必要か、服薬の必要がないと言った。」と述べ、死を前にしても理知と意志を失わなかったことに感動したと言う⁽³⁹⁾。この新聞記事とは『京報』1925年2月5日号の『孫中山先生の昨日の病況』であり、この記事は次のとおりである。孫先生の多くの友人は早く中薬を飲むように促し、協和医院と相談した。主治医はこの勧告を受け入れ、退院し伝統医学の治療を受けるか、さもなくば、この病院に留まりラジウム治療を受けるかのどちらかであると言う。中山先生は考慮して後者を選んだ。中山先生は、「中西医を比較して言うと、中医は数千年の歴史があり、中薬には外国で未発見のものがなお多くあるが、西医は病気の経路とその用いる治療方法を探り出すことにおいて中医より比較的優れている。」と言ったと書かれている⁽⁴⁰⁾。魯迅は孫文が結局中医の診察を受け中薬を飲んだことにはどういうわけか触れず、中医中薬を拒否したことだけ取り上げている。その言い方も孫文の方は中医にも配慮した言い方になっているが、魯迅の方は、「診断の知識に欠け、診断できない。」とはっきり批判している。この言い方より、魯迅の中医に対する見方は明白である。孫文は中薬の価値を認めているが、後で述べるが魯迅も中薬の効果は認めるようになり、つまり魯迅の中医中薬についての見方は孫文と似ている。

『即時日記』（1926年）では、「中医は人は玄妙無窮で内科はとりわけ最良であると言うが、私はどうしても信じられない。西洋医はどうか、有名な医者は診察料が高いし、多忙なの

で診察も雑である。無名であればむろんいくらか安い、しかし、どうもやはり躊躇してしまう。～私の本意は、なんとか新しい医学を普及しようと考えてのことだ。」「新しい中国の西洋医も、たいていいい加減なもので、手始めから漢方医のろくでもない手口を真似て、～要するに、西洋の医学は、中国ではまだ芽も出さぬうちから、すでに腐敗に近づいている。私は西洋医学しか信用しないが、近頃ではかなりしりごみするところがある。」⁽⁴¹⁾と述べる。また、薬局でもらった水薬について、「これは人間の問題である。仕事のやり方が的確でなければ、何もかもが疑わしくなる。」⁽⁴²⁾とも述べる。魯迅には中医はどうしても信頼できないが、かといって、西洋医であればよいのではない。つまり、中医であれ西医であれ薬局員であれ、人の姿勢が重要であると言っている。ここで確認しておきたいのは、魯迅の医学への見方は医学そのものに対する見方だけでは不足で、医学に携わる人の姿勢への見方も必要であることである。それから、ここで言うところの「新しい医学」は新しい西洋医学を指すが、魯迅はこの「新しい医学」の普及を目指す考えがあったことがわかる。

以上のような中医中薬に対する曲折する見方を経て『父の病氣』（1926年）は書かれたのである。中医に対する批判は厳しいが、また、中医の人に対する批判も魯迅個人の感情もあり厳しい。

（6）上海時代（1927年後半～）

1929年に中華民国政府の衛生部により中医の廃止が決議されると、これに驚き怒った中医たちは全国会議を開き、著名な政治家を動かし、中医廃止の決議案を否決させた。民族主義的な国粹運動の下、中医は国医に名称を変え、国医館を開き、西医を反民族主義として排撃した。

『《皇漢医学》』（1929年）では、「革命成功の後、『国

術』とか『国技』とか『国花』とか『国医』とかが怪しげな空気をまきちらしている。」と中医を国医と称して正当性を誇示する伝統医学に反発し、また、伝統的な中国医学を基にして作成した書籍の訳書の販売に反感を抱く⁽⁴³⁾。

魯迅は1929年に、江紹原が伝統医学批判の立場で書いた『中国人の西洋医薬と医薬学に対する反応』（原題）は有益であると賛意を示す手紙を江紹原に送っている⁽⁴⁴⁾。このことから魯迅は伝統医学批判に同意する立場に立っていたことがわかる。

魯迅は1930年に『自然界』に「楽文」という名前で刈米達夫著の『薬用植物』の翻訳を連載発表し、後に他の人の著作とともに出版している。「一薬用植物の沿革」で最も著名な薬用植物書は『本草綱目』とし、医薬、漢方薬と民間薬と三種に分け、「現在において大抵の重要薬用植物の有効成分はみなわかってきた。」⁽⁴⁵⁾ということで、薬用植物それぞれの生息地、種類、医薬の種類、用途、成分などが書かれ、表や写真が付いている。魯迅は、多忙にも関わらずわざわざ翻訳したのは、このような科学的根拠を示した薬用植物書が中国の医薬学に役に立つと思ったからであろう。1920年代以降、西医からも中薬は注目され出し、その科学的分析が求められていた。

『経験』（1933年）には「たまたま『本草綱目』をひらいて、ふと、こんなことを考えた。これは普通の書物であるが、なかには豊富な宝物が含まれている。もちろん、風を捕らえ影を掴むような記載もないわけでもないが、しかし大部分の薬品の効用は、長期にわたる経験によって、ようやくここまで知ることになったのである。～人々は一切の文化財は歴来の無名の人々が次第に作り出したものだとは大体知っている。建築、料理、漁獵、耕作、すべてそうでないものはない。医薬もそうである。」⁽⁴⁶⁾とあり、『本草綱目』の大部分の中薬の効果は長期の経験によって確認されたことを知る。このように中薬を評価す

ると同時に、その中薬の効果を長年追求してきた人々の姿勢をも評価する。当時新政府の要人であった許広平は、魯迅の中医中薬についての質問に、『魯迅の祖国文化遺産の一二の件を略叙する』（1956年）で、この『経験』や他の医薬を根拠にして魯迅は中医中薬を否定しているのではないと回答した⁽⁴⁷⁾が、

『本草綱目』は中薬の書であり、中医の書ではなく、他に挙げた医薬も中薬で、中薬の評価の根拠にはなりうるが、中医の評価の根拠にはなりえないのではないか。魯迅の『経験』の文章には「薬品」、「薬物」、「医薬」と書いてあるのに、許広平の文章では「中医中薬」になっている。中医は、診察、弁証、施治、処方の領域があり、それぞれに基礎理論や方法論がある体系で、それらを肯定したとはとても言えないのではないか。また同じようにこの『経験』を根拠にして魯迅が後期に中医を認めたとする見方がある。一例を挙げると、「魯迅の後期の、『本草綱目』の実践性、有効性、独創性に対する高度な評価は前期の中医の随意性、無分別性、後進性に対する一面的な評価とは互いに対立しながらも互いに成立させあい、全体的に祖国の医学遺産を全面的に評価、批判的継承する観点を体現している。」⁽⁴⁸⁾と主張するが、魯迅は『本草綱目』の中薬の有効性を理解し評価はしたが、中医の有効性まで評価したと見るのは行き過ぎではないか。この拙論で場合に応じて中医と中薬とを分別したのは、このような混同を防ぐためである。

また、魯迅は『私の種痘』（1933年）で、世界語専門学校で校医（鄧夢仙）に種痘を受けたが、効果のある種痘かどうか疑いを抱き、また、熱がありこの校医に受診したがどうもあやふやで、外国人の医者（山本医師）に受診して、この校医が未熟で外国人医師が確かであったことを述べている⁽⁴⁹⁾。

三 許広平と周海嬰から見た魯迅の中医中薬の見方

(1) 許広平から見て

許広平は『蕭紅の追憶』で1933年以降のことについて次のように述べている。許広平はこしけを治しに毎日医院へ通ったがよくなり、自分で「白鳳丸」を買って飲むと効果があり、さらに「白帶丸」を買って飲んだところ治ったと述べている。そして、「魯迅先生は中医は常々信用していなかったもので、すぐには言わず、医者治療にもう来なくてよいと言ってから彼に言った。魯迅先生は私が続けて『白鳳丸』を飲んで何ヶ月も治らなかった病気が治ったのを見て、中国で長年使用されてきた薬品についての思い込みがなくなり、今回の私の経験を取り上げ友人に話したところ、かれらの妻たちは型どおりによくなった。」⁽⁵⁰⁾と述べている。許広平は、魯迅が中医中薬を信用していないと認めていたが、許広平が買った薬の効果は魯迅は認めたと言っている。魯迅はこの中薬の効果は認めたが、これは薬品、中薬の効果であって、中医の効果をも認めたことにはならない。

そして、第二章(6)で既に述べたことであるが、魯迅が『経験』(1933年)で『本草綱目』の大部分の中薬はその効果があることを知ったと述べたことなどを根拠として、許広平は『魯迅の祖国文化遺産の一二の件を略叙する』(1956年)で、質問に対して魯迅は中医中薬を否定しているのではないと回答した。が、『経験』の文章は中薬の評価の根拠にはなりうるが、中医の評価までは言及していない。

続いて許広平は上記の著書で次のように記述する。魯迅が周建人と植物学から『本草綱目』までについて、また、生薬が急病を治すのに効果があることなどについてよく話をしていた。魯迅は『驗方新編』の薬を賞賛し、友達に紹介しその薬を使って子供の疝病を治療し、彼が罹った「抱腰龍」の病を民間の薬物で治療したが、当時許広平はそれらの薬名を残念にも忘れて

しまった。魯迅は白鳳丸が婦人病に有効である事実を確認した後、友達に紹介し、時に中医中薬が治療に有効な経験を医学刊行物に書いて紹介した。彼は常々回りの人に『わらじ医者』

（原文は草头郎中）と言われる医者について話をし、彼らは簡単な生薬で治療しとてもよい効果を上げたと見ていた。が、これらの医薬は重視されなかったので大きな働きを発揮することができず、あるいは長いこと経ち埋もれてしまい、魯迅はこの点を嘆き惜しみ、これらを整理研究する人がいないことは大きな損失であると思っていた⁽⁵¹⁾。『驗方新編』の薬、「抱腰龍」の病の薬物、白鳳丸、『わらじ医者』の生薬はすべて薬物で、魯迅は中薬の効果については既に述べたように認める方向にあった。民衆のために真面目に奉仕する「わらじ医者」の姿勢は魯迅は高く評価する。そして、彼らの中薬を科学的に整理し、継承し応用すべきであるという発言は、魯迅の中薬に対する評価を示す。少しの経験を紹介したという「医学刊行物」とは何であるのか不明である。

（2）周海嬰から見て

魯迅の息子の周海嬰から見てどうであろうか。全国政協委員の周海嬰が国家中医薬管理局の記者より、魯迅先生は中医を批判しているがどうかという質問を受けて、『魯迅は中医に反対ではない』で回答している。魯迅の反対しているのは中医ではなく、未熟な医者（原文は庸医）であり、私の家では中医薬を飲まないことはなく、中医の診察を受けないことはない⁽⁵²⁾と述べる。そして、魯迅の買ってきた烏鶏白鳳丸を許広平に飲ませると効き目があり、自分の過敏性喘息は背中に中薬の貼り薬で三年で治り、慢性胆嚢炎も中薬で治り、中薬は長い間検証されていて信頼性がある⁽⁵³⁾とも述べる。白鳳丸の効果のことはこの章の（1）で述べたが、周海嬰は「魯迅が買ってきた」と言うが、許広平は自分が「ひそかに買ってきた」と言う。また、背

中に塗布する喘息の民間療法は、『魯迅と私七十年』では、効き目がある時もありない時もある、あるいは全く効き目がない⁽⁵⁴⁾と述べているのに、ここでは三年で治癒したと言っている。これらの齟齬は発言内容に揺れがあることを示す。回答の中で述べられている、家で飲んだ中薬、烏鶏白鳳丸、貼り薬（からし粉）、胆嚢炎用の中薬、それから、第五章（2）で述べるが、魯迅が自己治療のために使った中薬も全部薬物であり、薬物の効果は魯迅は認める方向にあった。また、周海嬰は中医に受診したと言うが、その時期は魯迅死亡後のことではないか。海嬰が生まれてから魯迅死亡までの期間は魯迅が医師に診察を依頼するはずであり、第五章（1）でも述べることになるが、『魯迅日記』で調べても中医は見当たらない。中国人の歯科医の徐景文と陳順龍に魯迅が最後に受診した時は海嬰は生まれていない。西洋医学を学んだ陸炳常に母親等の診察を頼んだ時も海嬰は生まれていない。鄧夢仙はエスペラント学校の校医で西医であろう。湯爾和は日本で医学を学んだ西医である。高鏡朗は欧米で学んだ上海の小児科の西医で、周海嬰は無料で診てもらったと言うが、これは魯迅死亡後のことで、高鏡朗は家庭事情を汲んで無料にすることがあった。魯迅生存中許広平が中医に受診したことはありうる。また、魯迅死亡後は許広平が医師を選択するのであるから中医の受診はありうる。許広平の受診や魯迅死亡後のことはここでは範囲外である。

四 『本草』などの医学関連の書籍

『狂人日記』（1918年）の中の『本草なんか』については第二章（4）と注釈（31）で述べたことであるが、魯迅は『本草綱目』と『本草拾遺』を1918年までには読んでいた。

『“以って其の難解を震わす”』（『熱風』1922年）で「鉤輶格磔」の語について、また、『写真を撮ることなどについ

て』（『墳』1924年）で経水、精液、毛髪、爪、大小便、腕の肉の効果については『本草綱目』で調べたのではないかとと思われる。1923年の『魯迅日記』には、「影印元本『本草衍義』購入」とある。『《小さなヨハネス》動植物訳名小記』（『訳文序跋集』1927年）で陶弘景編著の『本草別録』から、また、既出の『経験』（1933年）で『本草綱目』から直接引用している。また、『推背図』（『偽自由書』1933年）で本草学者の文を引用している。また、『理水』（『故事新編』1935年）で『神農本草』の学者の説を紹介している。このように、魯迅は早くから『本草綱目』や各種の『本草』を読んでいた。そして、紆余曲折した挙句に『経験』での『本草綱目』の中薬への評価に繋がったのであろう。

『魯迅手蹟和蔵書目録』と『魯迅目録書目』の両書では、中医中薬に関わる書籍としては『支那中世医学史』の医学史書を挙げている⁽⁵⁵⁾。さらに、『魯迅目録書目』では『漢薬写真集成』の中薬の資料書を挙げていて⁽⁵⁶⁾、1930年の『魯迅日記一書帳』でも確認でき、「雷丸」や「猴棗」などの中薬の説明や写真・絵が載っている。他は第二章（2）での『人生象徴』の参考書として挙げた多数の日本医学書がある。これらの日本医学書は西洋医学を基にしている。

1912年以降の『魯迅日記一書帳』には、『最新生理学』、『生理学粹』、『Der körper des Menschen』、『細胞学概論』、『人体解剖学』、『生理学（上）』、『医学煙草考』、『橋田氏生理学』、『人体寄生虫通説』、『比較解剖学』の日本医学書と西洋医学書が見られる。よって、確認できる魯迅の医学関連の蔵書は、一冊の中国医学史書、一冊の中薬の資料書以外は皆西洋医学を基にした多数の日本医学書である。

五 診察依頼と魯迅の治療

(1) 診察依頼の医師

魯迅が実際どこの医師に診察を依頼したかがわかれば、魯迅の医学や医師に対する見方がわかる。診察の依頼と言ったのは、自分の診察の依頼もあるが、家族、親戚、友人や友人の家族等の診察の依頼や紹介もあるからである。また、避難のため病院に行く場合もある。

魯迅の父を診察した中医については、第二章(1)で述べた。魯迅が幼少年時代に受診した医師については不明であるが、西医ではなかったであろう。魯迅の叔父の周冠五はその著『魯迅一族と社会環境35年間(1902-1936)の変遷の回想』で、何廉臣に受診した魯迅の父が死亡した後、魯迅の祖父周福清も出獄後何廉臣に受診し、その誤診もあり死亡し、さらに、医術の心得があった周冠五の父親は何廉臣の診察に不審を持ちながらも結局何廉臣に受診し死亡し、他同様に受診し死亡した親戚もいると述べる⁽⁵⁷⁾。また、周建人は祖母の蒋氏も何廉臣に受診し死亡したと述べ⁽⁵⁸⁾、これらの人は皆中医の何廉臣に受診していた。『紹興通史』に拠れば1903年にアメリカ人の宣教師高福林が紹興に初めて西医医院を開設したと言う⁽⁵⁹⁾が、魯迅は1902年には留学していて中国にはいなかった。

魯迅が南京の学校へ行った1898年から、魯迅が仙台を去り朱安との結婚のため帰国し周作人を伴い渡日した1906年の前年までの魯迅の動向については、周作人の『旧日記の魯迅』が伝える。これには欠如の箇所があるようであるが、魯迅の受診についての記述はない⁽⁶⁰⁾。1905年より1912年4月までのことは不明である。

1912年5月以降のことはほとんど『魯迅日記』でわかり、『全集注釈索引—人物編』と『日記—人物注釈』が利用できる。以後必要なことのみ記す。

1912年より1926年までは北京時代で、魯迅は歯が悪く、アメ

リカの医科大学を卒業して王府井に開業した徐景文歯科医で1913年より、陳順龍歯科医で1917年より歯の治療が続く。第二章（5）に記したように徐景文、陳順龍への魯迅の評価はよくない。1923年より伊藤歯科医院に頻繁に通う。

病気の方では、1912年8月せきが出て池田医院で受診し、通院が続く。翌年紹興に帰省した際、西洋医学を学んだ陸炳常に母、豊丸、芳子の診察を依頼する。1914年に池田医師を尋ねたが不在で隣の北京医院の侯希民に受診する。1916年魯迅の母の姉の子、『狂人日記』のモデルと言われる阮久蓀を池田医院に受診させる。また、日本で医学を学び、北京医学専門学校校長となった湯爾和に処方をしてもらう。1917年周作人の為にドイツ医院のDr. GrimmやDr. Diperに往診を頼む。1919年紹興の家を売却し北京に家を買って家族を呼ぶ。1920年周建人の息子沛を日本人が設立した同仁病院に入院させ、二ヶ月程ほぼ毎日のように見舞う。同年7月直皖戦争のため家族を同仁病院に避難させる。1920年から1926年まで魯迅及び親戚友人はよく山本医院を利用する。たとえば周作人は1921年肋膜炎で入院し、1925年魯迅は肺病で頻繁に通い、1926年母の往診を頼むなどである。1924年エスペラント学校校医鄧夢仙は魯迅の脇腹の痛みは肋膜炎と診断するが、山本医師は肋膜炎ではなく神経痛と言う。1926年3・18事変時自宅を離れ山本医院、德国医院、法国医院へと避難する。

魯迅は北京を去り、厦門と広東を経て、上海に移り住む。1927年佐藤歯科医院で歯の治療をする。1929年北京に行った時、伊藤歯科医院で歯の治療をする。1929年宇都歯科医院で歯茎の腫れのため切開治療を受ける。1930年上海歯科医院の高橋医師に残りの歯全部抜いてもらい、治療が続く。上海歯科医院での歯の治療のため王蘊如に付き添う。高橋歯科医師が魯迅の家に何回か訪問し、魯迅も高橋医師を訪問することがある。1932年

前園齒科医院で義齒の修理を依頼する。

一方病気の方は、魯迅は1928・1929年日系総合病院の福民医院で受診し、1930年より石井医院での受診が続く。ドクターゲーテと呼ばれる石井医師に魯迅が本を贈る。魯迅は石民を平井博士に紹介し、自分も受診する。1932年篠崎医院での扁桃腺切除のため王蘊如の娘に付き添い、許広平のため往診を依頼する。魯迅が母親の見舞いに北京へ行った時同仁医院の塩沢博士に母親の往診を依頼する。同年坪井博士が魯迅の家に来て日本料理屋に誘い、浜之上医師も同席してふぐを食べる。また、魯迅は内山夫人、浜之上学士、坪井学士と郁達夫のために自作の詩を作り筆を執る。篠崎医院は福民医院に並ぶ総合病院であるが、魯迅は1933年4月に篠崎医院の秋田院長兼内科医、浜之上耳鼻咽喉科医、菅産婦人科医、坪井小児科医、須藤医院の須藤五百三医師、内山完造夫婦や他日本人を招いて宴席を設ける。また、同年10月に福民医院の頓宮寛院長兼外科医、吉田外科医、高橋レントゲン技師、古屋会計担当、高山産婦人科医、上海齒科医院の高橋齒科医、内山完造を同じ店に招いて宴席を設ける。魯迅が1934年に許寿裳に宛てた手紙の中に、魯迅が許寿裳の妻とその娘世瑒のため篠崎医院に付き添い、世瑒の眼病は中国人医師の言うトラホームではないと診断されたと書かれている⁽⁶¹⁾。一ヵ月後魯迅は世瑒のため須藤医院に付き添う。1935年許寿裳の娘世瑛のため魯迅は清明眼科医に付き添う。1936年許寿裳の妻の弟のために須藤医師への紹介状を病いを押して書く。

周海嬰は、1929年日系総合病院の福民医院で生まれる。魯迅は福民医院の産婦人科医師の久米医師に海嬰の出産の謝礼をする。同年福民医院での海嬰の診察が続く。その後、1930年より1932年帰国の頃まで平井博士による海嬰の診察が続く。平井博士帰国の後、1932年5月より篠崎医院の坪井医師による海嬰の診察が続く。

他に、篠崎医院の岡本外科医による海嬰の診察、津島助産婦による王蘊如の出産の世話、福民医院の小山内科医による知人の子の診察や須藤医師に代わり妹尾医師による魯迅の代診などがある。

それから、スメドレー女史に紹介された肺科医師のアメリカ人ダン医師が魯迅を診察する。そして、魯迅にとって最後の主治医となった須藤五百三医師は1933年海嬰を診察し、以降海嬰だけでなく魯迅の診察も多くなる。死去の2日前の1936年10月17日の『魯迅日記』には須藤先生が診察したと記されている。内村完造の『魯迅の思い出』には、死ぬ前日18日の朝と午後に須藤先生が往診し、夜には須藤先生と石井医院の石井医師が診察し、病状が回復せず、19日に須藤医師に急報があったが臨終には間に合わなかったと記されている⁽⁶²⁾。ダン医師の診察はやむなく承諾したが、中医の医師の診察を受けたらという勧告にも耳を貸さず、内山書店の内山完造にやはり須藤医師に頼むというメモを渡している⁽⁶³⁾。泉彪之介氏が詳しく述べているように、この中日関係の悪化の中、ダン医師、松井医師と石井医師も一時診察したが、元軍医だった日本人医師一人が最後まで主治医を担当して魯迅が急死したということが、周建人や許広平等に須藤医師に対する疑惑や不満を抱かせることになる⁽⁶⁴⁾。

北京時代と上海時代を通じて魯迅はほとんど日本人医師に診察を依頼し、親戚や友人などにも日本人医師を紹介した。海嬰の出産は日系病院で行われ、その後の診察はすべて日本人医師であった。受診の継続や医師の紹介はその医師に対する信頼の証である。そして、魯迅と日本人医師とは、中日関係の悪化の中でも、患者と医師との関係を越えた交流に発展している。「D医師」即ち須藤医師とは「ごく昵懇であった」と『死』に書かれている⁽⁶⁵⁾。このように交流が発展するのは、魯迅はたんに医師の技量だけでなく、人を見ているからである。

中国人医師には侯希民がいるが、代わりに受診しただけのことである。また、紹興に帰省した時母等の診察を依頼した陸炳常は西洋医学を学んでいる。その後は日本人の山本医師や塩沢医師に母の診察を依頼している。また、歯科医には、アメリカの医科大学を卒業した徐景文歯科医と、「西洋式の入れ歯」を扱い西洋式を取り入れていた陳順龍歯科医がいるが、魯迅の評価はよくない。鄧夢仙は西医ではあろうが、魯迅はその診断には疑問を持っている。湯爾和は日本で医学を学んだ。晴明眼科医院については、中医は眼科は不得手で、また魯迅の推薦であるから西医であると考えられる。このように、魯迅の意思で選択した中国人医師は西医か、あるいは西洋式を取り入れている。これらの中には魯迅の評価がよくない医師がいる。

他に、ドイツ人Dr.Grimm、Dr.Diperとアメリカ人ダンの欧米人医師がいる。ダンの場合はやむをえない選択であった。

以上より、魯迅が診察を依頼した医師は、主として多くの日本人医師とドイツ人医師であった。中国人医者にしてもほとんど西医か西洋式を取り入れていた。当時日本人医師は欧米医師より格下とみなされていた。が、魯迅が日本人医師を選択したのは、彼らの取り組む姿勢がよかったこと、自分が日本で医学を学んだこと、日本語ができること、共同租界に住み行きやすいこともあろうが、実際に受診してまた紹介してその効果を確認できたためであったことが考えられる。ただ、魯迅が日本人医師を多く選択したということは個人の選択であって、この個人の評価が一般的な中医中薬の評価には必ずしも繋がらないことに留意しなければならない。

（２）魯迅の治療

『魯迅日記』には魯迅が自己治療や予防に使った薬が記されている。胃痛・腹痛に生姜汁（健胃・鎮咳用）、発熱時に規那丸（鷄那丸・金鷄納丸等とも書かれ、キナ皮は健胃強壯薬、塩

酸キナは解熱薬）、下痢にサルチル酸ビスマス重ソーダ（重曹、リウマチス・神経痛・肋膜炎薬）、チフスの予防薬、五日間病休後に兜安氏補肺薬（せきや喘息を抑える肺の薬）、燕氏補丸（明滋養強壯剤か、服用後下痢三回）、背中・肩の痛みにアンチピリン（解熱・鎮痛薬）、背中・肩の痛みにテレビン油（関節炎・神経炎症薬、消毒薬）、発熱に蓖麻子油（下剤、服用後下痢2回）、歯痛に硫酸マグネシウム（瀉下剤）、カゼにアスピリン（解熱・鎮痛剤）、燕医師強壯滋養薬、脇腹の痛み止めにアスピリン（解熱・鎮痛薬）、下痢にHelp（消化剤）、胃痛にBismag（整腸剤）などである。これらは多病な魯迅が応急処置に自分の治療や予防のために用いた薬である。症状に対する薬として、重曹、蓖麻子油と硫酸マグネシウムは適合していないと思われるが、他は医者世話にならず自前の医学医薬の知識を用いて自己治療や予防をしている。

1918年の『魯迅日記』には、頭痛を起こしていた⁽⁶⁶⁾周作人のため沃化カリウム（ルゴール液用、殺菌・消毒剤）・苦味チンキ（健胃薬）・鶏那霜丸（解熱薬）・燕医生除痰薬を日本人経営の信昌堂で購入したと書かれている。以上挙げた薬の中で中国伝統の薬物は、生姜汁と蓖麻子油であろうと思う。規那丸は元来外来の薬で、兜安氏薬と燕氏薬は中国向け西薬であろう。

病弱な海嬰にも治療を施している。周海嬰はその著『魯迅と私七十年』（2001年）で家の常備薬を紹介している。硝酸銀とグリセリンの口内炎の薬、顆粒ヨード、おでき用の細かい粉薬、兜安氏製の馳名薬膏（Ointment）、韋廉氏医生薬局製の如意膏、虎標万金油（タイガーバウム）や兜安氏あせも薬の外用薬。肝油と咳止め水薬パラドールの内服薬で、この内服液以外はめったに売り薬は買わず、医者の方箋に従って薬を購入している。薬以外は、摂氏体温計、吸入器、ガラス浣腸器、ガーゼ、包帯、ピンセットやはさみである。魯迅がこれらの薬と器具を使って

治療していたことがわかる。息子が喘息を起こすと重炭酸ソーダと食塩の蒸気吸入法、安福消炎膏の温湿布法、からし粉の温湿布法やからし粉の直接塗布方法で自ら息子に治療を施し、それでも治まらない場合は医院に何度となく連れていったと述べている⁽⁶⁷⁾。これらはからし粉以外は全て外来の物か外来の物を中国で作った物かであり、つまり、中国元来の薬品や物はほとんどないようである。

六 他の伝統文化

魯迅に関わる他の伝統文化は魯迅はどのように見ていたであろうか。たとえば京劇である。魯迅は『梅蘭芳およびその他を略論する（上）』で、梅蘭芳は士大夫の寵児となり、士大夫の好むように作り上げられ、新作の脚本は士大夫の意にかなうように書かれて、人々は聞いてもわからないと述べる。「彼がまだ士大夫に後援されていないころに演じていた芝居は、むろん俗なもので、猥らで、汚くさえあったが、生き生きとして生気があった。『天女』に化してから高貴にはなったが、けれどもそれからは活気がなく、かわいそうなほど自重している。」と見て、士大夫のために梅蘭芳の本来の姿勢が歪み、生気のないものとなったことを憂慮する⁽⁶⁸⁾。

木版画は中国で最も早く生まれ、後西洋に伝わったもので、近年西洋の影響を受けて中国でも創作版画が育ってきた。魯迅は外国の版画や版画展を紹介し、版画集や制作方法書の序文を書き、自分で収集した版画を出版し、講習会に協力して版画の育成発展に力を注いできた。魯迅は『《ソ連版画集》序』で、「これらの作者には、一人として瀟洒、飄逸、伶俐、繊細なものはありません。」⁽⁶⁹⁾と、魯迅の好みもあるが、作者のよい姿勢を強調している。また『《近代木刻選集》（二）小序』で、「精気あふれる芸術家と鑑賞者がいてこそ『力』のある芸術を

生み出すことができる。」⁽⁷⁰⁾と述べ、自国の精気あふれる若者に期待し、中国伝統の芸術の復活に尽力するが、それを見守る鑑賞者が育つかどうかの問題であると言う。

絵画については、『“旧形式の採用”について』で、「我々には芸術史があり、中国に生まれた以上どうしても中国の芸術史をひもとく必要がある。何を採用するか？私の考えでは～宋の院画は、無気力で柔媚な所を捨て、緻密でゆるがせにしない所を取るべきである。～消費者がいる以上、必ず生産者がいるので、一方には消費者の芸術があり、他方には生産者の芸術もある。」⁽⁷¹⁾と述べ、中国伝統絵画のよくない旧形式を捨てて、よい旧形式を新しい作品の中に融合させて絵画の発展を促すべきであるが、消費者（鑑賞者）の意向が入ってくることが問題であると見る。

前記の資料『“旧形式の採用”について』では続けて中国伝統の年画と連環絵画（原文は年画、连环图画）について述べ、「これらはほんとうの生産者の芸術ではないかもしれないけれども、高級な有閑者の芸術と対立していることは疑いない。しかし、そうだとしても、それはやはり消費者芸術の影響を大いに受けている。」⁽⁷²⁾と述べ、年画と連環絵画は民衆のための伝統芸術であるが、消費者（鑑賞者）の影響が大きいので、これを導き、大衆のためにわかりやすさを追求していく姿勢を持つことが芸術家の役割であるとする。また、同様に連環絵画（原文は连环图画）などについて、「連環絵画と書物・新聞の挿絵を重視し、かつこれらに力を注ぐことを希望する。もちろん、欧州の大家の作品を研究すべきである。だが、さらには中国の古典籍の人物挿絵と画本、および新年の一枚刷りの年画にも留意すべきである。」⁽⁷³⁾と、中国伝統の連環絵画、挿絵、人物挿絵、画本と年画の芸術の擁護をし、地位を高め、発展させようとする。

以上のように、魯迅は各種の伝統的民衆芸術を擁護し、復活させ、その地位を向上させ、育成しようとした。これらには、もちろん技術、工夫、研究が必要であり、携わる人の純粋な姿勢が必要である。が、取り巻き連中、鑑賞者や社会・時代の要求がその人の姿勢に影響を与え、歪めることがあるので、これらにどう対応するかという姿勢が問われると見る。

七 終わりに

『父の病気』等の回想作品、『狂人日記』等の創作作品、『随感録』等の雑感文、仙台での西洋医学の学習、『人生象徴』のテキスト作成と生理学の授業、多数の日本医学の蔵書、診察依頼した医師や自分で使用した治療用の薬や器具のどこを見ても、また、少年時代、留学時代、北京時代、上海時代のいつの時期を見ても、魯迅は、紆余曲折があり、たゆたいながらも中医を批判し遠ざけ、西医を選択し重んじてきたことがわかる。魯迅は本来は中国人医師による治療を願っていたと思われる。が、中医に受診しても効果ははかばかしくなく、その考えや方法に疑問があり、その姿勢に問題があり、個人的な苦い体験も加わり、批判的見方を取り続けた。その批判は旧文化批判の一つであった。そして、医者に頼らず主として西薬と器具を用いて自分や海嬰の治療まで行っている。ただ中医全体の評価をするには、魯迅が中医を忌避した結果その経験した事例はあまりにも少なすぎ、この点問題視されるのは免れない。一方全部ではないが、中薬については自己治療の際の伝統の薬の使用、『本草綱目』中の中薬や特定の薬物の評価、わらじ医者の生薬評価や『薬用植物』の翻訳作業に表れているようにその効果を認める方向にあった。このような中医批判、西医受容、中薬評価という方向は孫中山も同様であり、政府衛生部が1929年に採用した中医廃止の原案を作成した余雲岫という西医も中薬の科

学的分析を主張していて、魯迅だけの見方ではない。中薬評価はかつて留学時代に学友厲綏之に「中薬為体、西薬為用」を説いた方向でもあった。

魯迅の中医中薬への見方は二つある。一つは有効性や合理性があるかどうかで、もう一つは携わる人の姿勢についてである。中医ではなく西医を評価するといっても、西医だからよいというのではない。その人がまともな考え方や技術を持ち、邪心・虚偽・欺瞞がなく、純粹に的確にたゆまず取り組んでいるかである。であるから、二つの見方が必要である。魯迅にとって医学は関心あるが、それ以上に関心があるのは人の姿勢である。

『文化偏至論』で、「世界に生存し列国と競い合うならば、第一に人を確立しなければならない。人が確立してはじめて全て事を起こすことができる。人を確立するためには個性を尊重し精神を発揚しなければならない。」⁽⁷⁴⁾と述べているが、このとおり、個人として自立した人の姿勢を確立することが重要で、この姿勢が確立されているかどうかに関心事なのである。目に見えるもの形而下のものは、目に見えないもの形而上のもの、即ち人の姿勢が確立されていなければ真のものではなく虚偽のものや表面的なものになると見る。中国の伝統医学は、儒教や老莊思想などの余計な観念が取り付き、非合理的な所が多く、利欲などの不純なものが人を乱しているとする。伝統医薬は、

『本草綱目』やわらじ医者を生薬のように、犠牲を犯してまで長年たゆまず純粹にまともに築き上げてきた人々の姿勢の賜であると見る。なお、人の姿勢を見る見方は無論医学の領域だけではない。たとえば『中国人は自信をなくしたのか』で、自信をなくしてはいない中国人を、「我々には古代から、没頭して励みに励む人もいるし、命がけで頑張りとおす人もいるし、民衆のために懇願する人もいるし、身を捨てて法を求める人もいる。」⁽⁷⁵⁾と挙げて、望ましい姿勢を持つ実在の人物を示す。

他の中国の伝統文化、版画、絵画、年画、連環絵画、挿絵、人物挿絵、画本も中医中薬と同じで、これらに携わる人の技術や工夫が重要であることは言うまでもないが、それらの人の姿勢、個人として自立した純粋な生氣ある姿勢が求められる。そして、鑑賞者たちの干渉、意向の影響があり、また、時代の要請や影響もあり、これらにどのように対応するかという姿勢が問われる。京劇の梅蘭芳は士大夫たちの影響で本来の姿勢が歪み生氣がなくなってしまった。合理的な考え方や優れた技術を持ち、回りや時代からの影響の問題を克服して純粋にまともに的確にたゆまず築き上げていけば、その精髓や効果は芸術の形になって現れると見る。こうして伝統が築きあげられるのである。礼教などの旧思想によって干渉されることなく自立した生氣ある文化の建設、これが、魯迅の文化面におけるナショナリズムである。そして、これらのよき伝統を保持する人々に対して、これらの伝統芸術の擁護、地位向上と発展のために、魯迅は身を削るようにして尽力した。

〈注釈〉

- (1)(14)(17)魯迅『《呐喊》自序』（『呐喊』）416、416、415頁、
『魯迅全集第一卷』人民文学出版社1981年版。以下(45)以外は
『魯迅全集』はこの版を使う。
- (2)ラルフ・C・クロイツァー著、難波恒雄訳『近代中国の伝統医学』、創文社1994年。
- (3)(6)(8)(10)周作人『知堂回想录』26・27、30・31、29、31頁、
三育图书文具公司1971年。
- (4)(7)(11)(58)周建人口述、周晔编写『魯迅故家的败落』98～
105、103、118、284頁、湖南人民出版社1984年。
- (5)周遐寿『魯迅的故家』142頁、人民文学出版社1981年。

- (9) 鲁迅『自言自语』（『集外集拾遗补编』）95頁、『鲁迅全集第八卷』。
- (12) 藤井省三『鲁迅《父の病気》再考』1083頁、日本中国学会創立五十年記念論集、汲古書院1998年。
- (13) 鲁迅『我怎么做起小说来』（『南腔北调集』）513頁、『鲁迅全集第四卷』。
- (15)(36) 鲁迅『从胡须说到牙齿』（『坟』）249、247～249頁、『鲁迅全集第一卷』。
- (16) 須藤五百三『医学者所见的鲁迅先生』348頁、周建人茅盾等著『我心中的鲁迅』湖南人民出版社1979年。この話は増田渉『鲁迅の印象』55頁（大日本雄弁会講談社1948年）にも記載されている。
- (18) 鲁迅『琐记』（『朝花夕拾』）293頁、『鲁迅全集第二卷』。
- (19)(20)(32)(33) 鲁迅『随感录三十三』（『热风』）300、301・302、298、302頁、『鲁迅全集第一卷』。
- (21) 鲁迅『破恶声论』（『集外集拾遗补编』）28頁、『鲁迅全集第八卷』。
- (22) 陈独秀『敬告青年』14頁、『新青年第1卷第1号』汲古書院1970年。
- (23) 巴金『家』353頁～、人民文学出版社1981年。
- (24) 厉绥之『五十年前的学友—鲁迅先生』330頁、『鲁迅回忆录二集』上海文艺出版社1979年。
- (25) 『鲁迅医学ノート六冊本』は北京鲁迅博物館によってその電子複製本が2005年に東北大学図書館に寄贈された。
- (26) 『藤野先生』（『朝花夕拾』）に藤野先生担当の「解剖実習」を受講したとある。また、『鲁迅在杭州』（『西湖』文艺编辑部1979年）の（许）钦文『鲁迅在杭州』（3頁）と夏丐尊の『鲁迅翁杂忆』（41頁）にも、鲁迅の死体解剖の話が掲載されている。
- (27) 鲁迅『科学史教篇』（『坟』）26頁、『鲁迅全集第一卷』。
- (28) 鲁迅『什么话？』（『集外集拾遗补编』）414頁、『鲁迅全集第

- 八卷』。
- (29) 魯迅『华德保粹优劣论』（『准风月谈』）211頁、『魯迅全集第五卷』。
- (30) 拙論『人生象徴について』、中国言語文化研究会編『中国言語文化研究 第13号』2013年。
- (31) 魯迅『狂人日記』（『呐喊』）425・426頁、『魯迅全集第一卷』。李時珍著張紹棠重訂『本草綱目一第52卷人部人肉』（台灣商務印書館1968年）等で、『本草拾遺』における人肉で肺病を治す唐の陳藏器の説に李時珍は異議を唱えている。また、このような誤記があることは『狂人日記』にも書かれている。
- (34) 徐友春主編『民國人物大辭典（增訂本）（上）』674頁、河北人民出版社2007年。
- (35) 魯迅『忽然想到』（『華蓋集』）14頁、『魯迅全集第三卷』。
- (37) 魯迅『弟兄』（『彷徨』）135～139頁、『魯迅全集第二卷』。
- (38) 广东省哲学社会科学研究所历史研究室，中国社会科学院近代史研究所中华民国史研究室，中山大学历史系合編『孙中山年譜』369～372頁、中華書局1980年。
- (39) 魯迅『中山先生逝世后一周年』（『集外集拾遺』）293・294頁、『魯迅全集第七卷』。
- (40) 『孙中山先生昨日病況』、『京報』1925年2月5日号。
- (41)(42) 魯迅『马上日記』（『華蓋集續編』）310・311、312頁、『魯迅全集第三卷』。
- (43) 魯迅『《皇漢医学》』（『三閑集』）140頁、『魯迅全集第四卷』。
- (44) 魯迅『291022致江紹原』（『书信』）689頁、『魯迅全集第十一卷』。
- (45) 魯迅『药用植物』568～571頁、『魯迅全集第十四卷』人民文学出版社1973年版。
- (46) 魯迅『经验』（『南腔北调集』）539頁、『魯迅全集第四卷』。

- (47)(51) 许广平『略谈鲁迅对祖国文化遗产的一、二事』373・374、374頁、马蹄疾辑录『许广平忆鲁迅』广东人民出版社1979年。原載は1956年『新港』10月号。
- (48) 黄舜『《父亲的病》与鲁迅的中医观』14・15頁、许昌师专学报（社会科学版）1985年。
- (49) 鲁迅『我的种痘』（『集外集拾遗补编』）349頁、『鲁迅全集第八卷』。
- (50) 许广平『追忆萧红』296頁、马蹄疾辑录『许广平忆鲁迅』广东人民出版社1979年。
- (52)(53) 周海婴口述 柴玉巨锋记述『鲁迅并不反对中医』、『中国中医药报』2008年3月3号。
- (54) 周海婴『鲁迅与我七十年』 「効き目がある時とない時がある」は24頁、「全くない」は170頁、南海出版公司2001年。
- (55) 『支那中世医学史』（日本語）は寥温仁著、京都カニヤ書店1932年発行、北京鲁迅博物馆编『鲁迅手蹟和蔵書目録第三集日文部分』（1959年）の86頁、中島長文編著『鲁迅目睹書目—日本書之部』（1986年）の23頁に記載。
- (56) 『漢藥写真集成』（日本語）は中尾萬三・木村康一編、上海自然科学研究所1929・1930年発行、中島長文編著『鲁迅目睹書目—日本書之部』（1986年）の24頁に記載。
- (57) 周冠五『回忆鲁迅房族和社会环境35年间(1902—1936)的演变』25・26頁、人民文学出版社1959年。
- (59) 李永鑫主编『绍兴通史 第五卷』490・491、494頁、浙江人民出版社2012年。
- (60) 周遐寿『鲁迅小说里的人物 附录一旧日记里的鲁迅』241～281頁、上海出版公司1954年。
- (61) 鲁迅『341027-2致许寿裳』（『书信』）550・551頁、『鲁迅全集第十二卷』。
- (62)(63) 内山完造『鲁迅の思い出』25～29、25頁、社会思想社1979

- 年。内山完造氏は松井医師にも診察を依頼したが不在であったと書かれている。
- (64) 泉彪之介『須藤五百三ー魯迅の最後の主治医』68・69頁、『福井県立短期大学研究紀要』10号1985年。
- (65) 魯迅『死』（『且介亭杂文末編』）611頁、『魯迅全集第六卷』。
- (66) 周作人『周作人日記一上』1918年11月20日に頭痛があり、21日に苦味チンキと燕医生除痰薬を飲むとある、大象出版社1996年。
- (67) 周海嬰『魯迅与我七十年』20～24頁、南海出版公司2001年。
- (68) 魯迅『略論梅蘭芳及其他（上）』（『花邊文學』）580頁、『魯迅全集第五卷』。
- (69) 魯迅『《蘇聯版畫集》序』（『且介亭杂文末編』）593頁、『魯迅全集第六卷』。
- (70) 魯迅『《近代木刻選集》（二）小引』（『集外集拾遺』）333頁、『魯迅全集第七卷』。
- (71)(72) 魯迅『論“旧形式的采用”』（『且介亭杂文』）23、23頁、『魯迅全集第六卷』。
- (73) 魯迅『“连环圖畫”辯護』（『南腔北調集』）448頁、『魯迅全集第四卷』。
- (74) 魯迅『文化偏至論』（『墳』）57頁、『魯迅全集第一卷』。
- (75) 魯迅『中國人失掉自信力了嗎』（『且介亭杂文』）118頁、『魯迅全集第六卷』。